

平成22年度 清水町教育委員会の活動状況に関する 点検・評価報告書

点検・評価の概要

教育委員会は、地方教育行政の組織及び運営に関する法律により、毎年、事務の管理・執行の状況について点検・評価を行い、その報告書を議会に提出するとともに公表することが義務付けられています。

また、その際、客観性を確保する観点から、教育委員会以外の学識経験者による知見の活用を行うこととなっています。

清水町教育委員会としては、この点検・評価を、本町の教育資源を有効活用し効果的な教育行政の推進を図るための確認の機会であると捉えるとともに、住民への説明責任を果たすことができるように進めていきます。

評価対象は、年度当初に示す教育行政執行方針に基づき実施する事務事業のうち、本町の教育行政として特色ある事務事業としました。

また、点検・評価報告書の作成にあたっては、選定した事務事業の推進状況を自己評価し、外部知見の活用として学識経験者から意見をいただき、今後の教育行政に活かすこととしています。

なお、報告書は毎年度議会へ提出し、公表します。

学識経験者として、北海道教育庁十勝教育局及び前教育委員長からそれぞれご意見をいただきました。

点検・評価した項目

清水町の教育行政の中で特色ある事務事業として次の8項目を選定しました。

- 町民総ぐるみの“しみず「教育の四季」”の推進
- 全国学力・学習状況調査結果を受けての取り組み
- 就学前教育を重視した幼保・小連携教育の推進
- 「おいしい笑顔が見える給食」と「地産地消」を意識した食育の取り組み
- 生活習慣を身につける生活リズム向上推進事業
- 清水の子どもにこにこプラン事業の取り組み
- 地域の教育力を活用する生涯学習ボランティア登録派遣制度
- 子ども達への読み聞かせを中心とした図書館ボランティアの活動

町民総ぐるみの“しみず「教育の四季」”の推進

現状と成果

清水町教育理念「心響」～打てば響く 心に響く～を基軸として、“心を通わせ、互いに響き合う感性豊かな教育の推進”を目指し実践指標“しみず「教育の四季」”を平成18年4月に宣言して5年になりました。

以来、家庭・学校・地域が連携して、「あいさつ、返事、後片付け」「早寝、早起き、朝ごはん」「お手伝い、家庭学習の習慣化」など子ども達の基本的な生活習慣の定着と規範意識の高揚を図る教育活動を展開してきました。

本年度についても、4月の推進協議会を開催し、前年度の実践の成果と課題等の協議及び一年間の活動計画を確認して、“しみず「教育の四季」”を幼稚園や各小中学校の経営の中核に据え、教職員の共通理解の基に児童会や生徒会での活動やPTAへの啓発活動を推進してきました。

具体的な取り組みとしては、4月に「教育の四季」リーフレットを町内全戸に配布し、昨年度実施した保護者対象の「基本的な生活習慣」のアンケート調査の結果を配布して、幼稚園や保育所、各小中学校の運営の参考資料として活用、第4回「子どもフォーラム」を開催し、町内小中高の活動報告及び意見交換を行い、各教育関係者から指導・助言を受け、町内各保育所や幼稚園の保護者参観日に「教育の四季」の趣旨や取り組みについて説明して、就学前教育の重要性について理解を深めてもらい、高齢者学級講座で「教育の四季」の4年間の実績を報告して、子供たちの健全育成への理解と協力をお願いし、町内保育所、幼稚園、小中学校、高校から、毎月子ども達や教職員の「ちょっといい話」を集約して配布し、それぞれの教育活動の啓発に努めました。

今後の課題

- ・“しみず「教育の四季」”の「12の窓」の取り組みについて、今後とも広く町民への啓発活動を推進していく必要があります。
- ・幼保・小連携による就学前教育の充実と発展を図るとともに、子育て支援課などの関係部局との連携の基に就学前教育の重要性の啓発に努め、家庭教育への支援に努めていくことが重要となっています。
- ・町民総ぐるみの教育活動を展開するため、学校支援ボランティアなど地域の教育力を活用した開かれた学校づくりや各町内会組織及び各種団体等への浸透を図っていくことが大切です。

今後の対応策

- ・「教育の四季」の全戸へのリーフレット配布など、町民全体への浸透を図ります。
- ・保護者を対象とした「子供の基本的な生活習慣」アンケート調査を実施してその分析・結果を今後の子育て資料として活用していきます。
- ・第5回「子どもフォーラム」の内容を工夫して、小中高の児童生徒の実践交流を深め、事業推進の原動力とします。
- ・町内小中学校はもとより、各保育所、幼稚園の保護者や高齢者への浸透を図っていきます。

学識経験者の意見

「教育の四季」のリーフレットの全戸配布や基本的な生活習慣のアンケート調査結果の活用などにより、規範意識の高揚と基本的な生活習慣の定着を図る取組を推進しており評価できます。今後は、子育て支援課等の関係部局と連携を図り、家庭教育を多面的に支援する取組の一層の充実を期待します。

この取り組みは清水町の誇りです。高校生を含めた子どもフォーラムも大変良いです。清水に生まれ、学んでよかった、そういう時が来るような気がします。

全国学力・学習状況調査結果を受けての取り組み

現状と成果

小学校6年生及び中学3年生の全児童生徒を対象とする全国的な学力・学習状況の調査が4月20日に実施され、平成21年度までの悉皆調査から抽出調査及び希望利用方式に切り替わりましたが、小中学校全校が実施しました。

その調査結果が11月2日に公表され、本町における教科に関する調査（国語、算数・数学）の平均正答率は、小学校・中学校とも全国平均と同程度又は上回ることができました。しかし、中学校の数学では基礎的・基本的な知識・技能を身につけさせるため、なお一層、指導の工夫改善等を図る必要が見られました。また、学習状況に関する調査では、全国に比べ基本的な生活習慣が定着しており、自尊意識・規範意識についても全国より高い傾向にありました。

これらの調査結果を踏まえ、教育委員会として学校改善支援プランを作成のうえ各学校に示し、各校においても調査結果を生かした今後の指導について具体的方策をまとめ、保護者にお伝えするとともに、放課後や夏冬休みの学習機会の確保など学習支援などの工夫をしたところです。

今後の課題

- ・本調査で測定できるのは学力の一部ではありますが、調査結果を受けて各学校で学力・学習状況を把握・分析して、教育の成果と課題を継続的に検証し、教育指導や学習の改善等に役立てていく必要があります。
- ・本町の児童生徒は、家庭での学習時間が小学校では昨年より上昇したものの中学校とともに全国と比較するとまだ短い傾向にあります。家庭学習習慣は概ね定着しており、その中でも基本的な生活習慣が身に付いて、自尊意識・規範意識が高く、学習に対する関心・意欲のある児童生徒については、教科に関する調査の正答率が高い傾向にあります。

このことは、これまで取り組んできた小学校低学年の少人数学級、幼保・小連携の施策や“しみず「教育の四季」”などの実践が影響していると考えられるので、それらの施策の継続が必要となっています。

今後の対応策

- ・各学校との連携を図りながら、小学校低学年における少人数学級の継続、幼保・小連携を重視した就学前教育の充実を推進し、児童生徒の学習意欲を高めるための学校の取り組みを支援していきます。
- ・規範意識の向上による学習習慣の確立や、基本的な生活習慣の育成を図り学びに向かう姿勢の向上のため、“しみず「教育の四季」”の普及啓発を推進します。
- ・教員の資質向上に関わりましては、学校教育課教育指導幹の学校訪問、外部講師の活用、十勝教育局指導主事派遣の要請、地域の人材による学習指導に関する支援体制を工夫していきます。

学識経験者の意見

全国学力・学習状況調査の結果を踏まえた学校改善支援プランを作成し、各学校における具体的な指導の改善に生かすとともに、放課後や長期休業期間における学習機会の確保に努めており、評価できます。

今後は、基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得に向け、学習内容の習熟の程度に応じた指導の工夫など、個に応じた指導の一層の充実に期待します。

調査結果を分析・検証し、課題を改善することは、学校・教師の教育力の向上や家庭学習の重要性が理解できるようになります。

就学前教育を重視した幼保・小連携教育の推進

現状と成果

平成 15 年度に「特区」を活用した小学校低学年における 20 人程度の少人数学級を具現しました。これは、生活集団と学習集団の一体化の中で、規範意識や躰、マナーの日常化を図るきめ細かな学習環境を整備するものでした。

その理念の延長線上に、就学前教育の充実の必要性を強く感じられたことから、町内の幼稚園・保育所と小学校のなめらかな連携を図るために、次の視点から調査・研究を進めました。それは、教育課程と保育計画とのつながり 教師と保育士との連携と研修 幼児と児童の学びと遊びの交流などでした。

調査・研究は、平成 17 年度から 2 カ年、道教委の委託を受けて、理念と実践とを指導機関の協力のもと進めたところです。

平成 19 年度以降は、2 年間の調査研究事業の成果と課題を踏まえ、無理の無い範囲で幼保・小のなめらかな接続を図る取り組みを継続実施しています。

具体的な取り組みは、清水地区と御影地区の 2 ブロックに連携推進会議を設け、幼児と児童の交流はもちろんのこと、教師と保育士との交流及び研修を通して互いに指導・援助の違いなどの共通理解を図り、発達や学びの連続性を重視した活動を行っています。

今後の課題

- ・基本的な生活習慣や思いやりの心をはぐくむ教育活動を幼稚園・保育所、小学校が同じ目線で一貫した取り組みをしていくことが大切であり、教師と保育士との間の情報交流や相互理解を図るためにも幼保・小連携の継続的な取り組みが求められています。
- ・そのためには、連携の取り組みを継続することの重要性を全体で認識し、交流活動のねらいや方法について改善を重ねていくことが大切です。
- ・連携を図るためには、保護者や地域の理解や協力を広めることも必要となります。

今後の対応策

- ・新保育指針や新学習指導要領においても幼保・小連携が明確に位置づけられたことにより、今後も重要な課題として道内においても先進的な取組事例として高く評価をいただいているところです。無理なく継続することが大切であり、清水町幼保・小連携協議会では連携の柱となる骨格を協議し、実践面の取り組みは各ブロック推進会議で担当教員を中心に連携を推進していきます。

学識経験者の意見

幼稚園・保育所と小学校が、互いに学習や生活の様子を見合う機会や、実態や事例について交流する合同研修会・交流会、年長児と小学校第 1 学年や第 5 学年児童との交流する機会などを設け、「幼保・小のなめらかな接続」に向けた取組を推進しており評価できます。

今後は、幼稚園・保育所と小学校の滑らかな接続が、小学校以降の生活や学習の基盤になるよう、発達や学びの連続性を意識した取組のより一層の充実に期待します。

子どもや保護者の不安がなくスムーズな成長と意識の高揚につながります。この時期、特に基本的な生活習慣を定着させたいので、大変良い取り組みです。

「おいしい笑顔が見える給食」と「地産地消」を意識した食育の取り組み

現状と成果

食育については、「おいしい笑顔が見える給食」と「考える給食」を合言葉に、毎月発行の「給食だより」で、給食を通して児童生徒に正しい食事の取り方や望ましい食習慣を身に付けさせるなど、食に関する指導の充実を図るとともに、地元産の食材を多く利用したメニューを取り入れています。

また、給食センターに隣接する試験ほ場で栽培した春播き小麦は、十勝農業改良普及センターや清水町農業振興公社など関係機関と連携し、清水中学校1年生の授業協力の活動として生徒に収穫を体験させ、小麦の農業生産を学習しながら、パンやうどんの原料として石臼挽きによる製粉を実践しました。

なお、独自メニューとして次の取り組みを行っています。

十勝清水めぐみの給食～清水産の食材を使ったメニューとすることで、町内ではどのような食物が生産・加工・販売されているのかを理解することに役立っています。

生徒が考えたメニュー～生徒が栄養計算の上、考えたメニューを全国学校給食週間の一環と位置づけ実施しましたが、給食センターで発行する「給食だより」や「珠玉の給食メニュー」にも載り、子ども達への関心も高まっています。

バイキング給食～小学校6年生、中学校3年生の卒業を祝うため実施していますが、継続を待ち望まれています。

今後の課題

- ・今年度、十勝清水めぐみの給食週間に清水町の牛肉ブランド「十勝若牛」のカットステーキを提供しましたが、今後の提供に当たっては肉の量や提供方法に工夫を凝らす必要があります。
- ・試験ほ場について、作付けから収穫までの一環した食作り体験を進めることができましたが、子どもたちの苦手な野菜の収穫体験など新たな取り組みも求められています。

今後の対応策

- ・地元農業者等の連携を進めます。
- ・試験ほ場の収穫物を給食に活用することにより、野菜について考える給食を実践し、野菜をおいしく食べる工夫を図ります。
- ・既存の独自メニューを継続します。

学識経験者の意見

給食だよりの発行や地場産物の活用など、学校給食を生きた教材として活用し、家庭や地域と連携して食に関する指導を行っており評価できます。

今後は、特別活動や関連する教科等において、食事の重要性や心身の健康などの観点から、指導内容の充実を図ることを期待します。

清水町の給食は大変好評です。今後も地産地消を取り入れ、農業者や各団体と連携し、安心、安全そして食するまでの過程が理解できるように取り組んでほしい。

生活習慣を身につける生活リズム向上推進事業

現状と成果

家庭におけるライフスタイルの変化により、人や社会との関わりが子どもに不足しています。

一方、生活体験や自然体験の豊富な子どもほど、道徳観や正義感が身についているといった調査結果が出ており、児童期に「早寝、早起き、食事、挨拶、後片づけ、遊びなど」の基本的な生活習慣を身につけることが重要であると考えられることから事業を実施しました。

本年度は4回目の開催となり、小学4年生以上を対象に平成22年10月24日から6泊7日の期間を設定し募集したところ20人(清水2人・御影18人)の申込がありました。募集当初より御影からの申込が多く、清水からの申込が少ない現象がみられましたが、これは前年度清水小学校において新型インフルエンザのため参加者がいなかったことから、事業の意義や内容が十分浸透していなかったためと考えられます。

また、御影からの参加者は4年生から3回目の参加者も多く、友達同士・保護者間で事業の内容等について周知が図られた事により、御影からの参加が増えたものと思われます。募集締切りにおいて清水からの参加が2名しかいなかったため最終的に清水からの参加者は参加を取りやめる残念な結果になりました。今回も職員6名と協力スタッフとして清水町女性団体連絡協議会より15名のご協力を頂きました。子どもたちはモデル的生活リズムでの生活により、普段体験することの少ない家事全般を体験し生活することの苦労を実感し、家族(お父さん・お母さん)の大変さを感じたようです

今回の通学合宿には前回の参加者7名の内6名が参加しており、生活習慣に対する知識と経験があることから良き手本として初めての参加者をリードし、より良い成果が得られたと感じました。

期間中は決められた学習や家庭での身の回りの行わなければならない事が多く、自由な時間はとても少ない環境でしたが、遊び時間を工夫の中から作り出していました。この過程にも仲間作りの効果が現れていました。

今後の課題

- ・参加者が御影に集中し、学校生活の延長上の交流となってしまった。通学合宿にメリハリを持たせ交流を図れる生活環境を作るためにも清水からの参加者をバランス良く募る事が必要です。
- ・今後も保護者及び児童への事業PRが必要です。

今後の対応策

- ・参加した児童が生活習慣として実践できるよう、保護者の理解と保護者自身の生活習慣の改善を求める取組を検討します。
- ・プログラムの作成にあたっては参加対象学年等を考慮したプログラムを作成します。
- ・高校生や生涯学習ボランティアを活用し、子どもの学習やメンタルヘルスケアの充実を図ります。

学識経験者の意見

道徳観や正義感、規範意識等をはぐくむ上で大切であるとされる、家事(お手伝い)等も含めた望ましい生活習慣による生活を体験できる事業を推進しており評価できます。

今後は、参加対象学年の発達段階を考慮したプログラムの改善と、参加した児童の声などによる成果の周知をとおした、本事業の一層の充実に期待しています。

学校外での集団による生活や自然体験は、生きる力、知恵、協調性等を育む取り組みですので一層充実されるよう期待します。

清水の子どもにこここプラン事業の取り組み

現状と成果

清水の子どもにこここプラン事業は、文部科学省が実施している放課後子ども教室推進事業に基づき、放課後や週末に子どもたちの安全・安心な居場所を設け、子どもたちが地域社会の中で心豊かで健やかに育まれる環境づくりを実施しています。

このプランは、文部科学省と厚生労働省が連携して設置している放課後子どもプラン推進事業に基づき、本町でも社会教育課と子育て支援課が連携して、カワウソ教室事業（放課後子ども教室推進事業） 学童クラブ事業（放課後児童健全育成事業） 連携活動（放課後、週末の団体活動）の3事業で実施しています。

カワウソ教室事業は、清水小学校の余裕教室を主会場に、学童クラブと連動して年間200日間実施しました。また、カワウソ教室事業としてのカワウソ広場を、清水地区、御影地区で各25日間実施し、地域ボランティアと児童が遊びを通して交流しました。

参加児童は、清水地区は99人の登録者と学童クラブ児童がともに活動しました。御影地区は、学童クラブ児童を中心に御影小学校全児童を対象に活動しました。

指導者は、年間を通して活動してもらう教室指導員を昨年より増やし、日々の教室を指導してもらうとともに、町内各団体を中心に構成してもらっているカワウソ隊ボランティアには、カワウソ広場を指導してもらいました。カワウソ隊ボランティアについては、年間の活動回数をこれまでより減らすなどして、無理なく継続支援してもらえるように、活動負担の軽減を図りました。

清水地区においては、学童クラブと一体的に運営したことにより、日常的な放課後の居場所としての位置づけが明確になりつつあります。そして保護者からは、放課後の居場所として理解され始めました。

今後の課題

- ・学童クラブと一体的に運営したことにより、プログラムが融合する反面、各々の事業の特色が薄まりつつある。
- ・多様な児童が常時参加していることにより、その指導や健全育成に際し地域ボランティアである指導員やカワウソ隊が、戸惑いを感じるが増えつつある。

今後の対応策

- ・活動内容においては、子ども教室の目的である体験活動等をさらに提供できるように、学童クラブ等と調整しながらプログラムを開発していきます。
- ・児童の指導・健全育成においては、学校教員と・連絡を密にするとともに指導者の研修機会を充実していきます。
- ・健全育成の意識を地域と一体となって醸成するため、連携団体との情報交流を推進します。

学識経験者の意見

町の社会教育課と子育て支援課が連携した清水の子どもにこここプラン事業により、学校、家庭、地域が一体となって、子どもの健やかな成長を支える取組を推進しており評価できます。

今後は、学校における放課後の学習サポートなどとの連携を図った取組の充実に期待します。

子どもたちには、学校や教室とは別の楽しい取り組みだと思えます。遊びや体験活動で社会性や協調性が身に付くと思えます。時間の有効活用で保護者も安心できると思えます。

地域の教育力を活用する生涯学習ボランティア登録派遣事業

現状と成果

町民のボランティア意欲をまちづくりや生涯学習活動に活かす「生涯学習ボランティア登録・派遣事業」を平成14年度から実施しました。この事業は、個人が仕事や趣味で得た知識や技術を町民の学習活動に還元したいという方や、教育事業や教育施設に対して貢献したいという方を登録し、学習講師や活動支援として求める町内の団体・組織に派遣します。この学習成果の還元と人と人を結びつけることにより、互いに学び合える町づくりを促進することをねらいとした事業です。

加えて平成20年度からは、北海道の委託事業である「学校支援地域本部事業」と一体的に運用することにより、学校教育活動に重点をおいた事業展開を図っています。一方、社会教育分野での派遣要請は僅少ですが、芸術分野等の専門性が求められるボランティアに対しての要請がありました。

登録者は、芸術文化やスポーツ、教養などの分野で68人おり、学校教育活動に対する支援者が増加しました。これは、学校支援地域本部事業として専任の地域コーディネーターが配置されたことにより、積極的に町民に対して参加が働きかけられたためであります。そのため、学校ボランティアに町民がこれまで以上に参加するようになりました。さらには、学校とボランティアの調整がよりスムーズになり、活動意欲の継続につながっています。

一方、活動の様子を広く町民に広報することにより、ボランティア活動が広く認知されるようになり、活動の評価につながりました。

このように、学校支援地域本部事業において学校ボランティア活動が充実して展開されているのは、生涯学習ボランティア事業による町民の学習活動に対する支援の仕組みを構築した成果であり、協働の町づくりが着実に推進されている表れであります。

今後の課題

- ・ボランティア意識を普及させるためには、自発的ボランティアと共同して活動を企画していくことが必要です。
- ・継続したボランティア活動を推進するためには、活動者や学校等の負担軽減と活動における手当てが必要で

今後の対応策

- ・ボランティア意識を高めるために、活動が社会から評価される仕組みをさらに検討します。
- ・新しい地域づくりのため、ボランティア活動を含めた人々の意欲と責務を喚起することを検討します。

学識経験者の意見

平成14年度から「生涯学習ボランティア登録・派遣事業」を推進し、とりわけ、平成20年度からは学校ボランティア活動の充実を図るなど、協働の町づくりを着実に推進されており評価できます。

今後は、学校教育はもとより、社会教育でのボランティアの活用を広く啓発する取組の充実に期待します。

すべての事業がボランティアと深くかかわりがあり、地域、町民の教育力の効果が大きいと思います。登録者の拡充と継続を望みます。

子ども達への読み聞かせを中心とした図書館ボランティアの活動

現状と成果

図書館の読み聞かせボランティアとして平成4年に『五月会』が結成され、現在会員5名で活動しています。月2回の図書館でのお話し会を基本に、小学校・幼稚園・保育所のほか、他町村での公演等、安定した活動をしています。

昨年からはじめたお話し会の参加ポイントカードの配布も引き続き行い、継続して参加する親子が増えてきています。

また、読み聞かせに興味を持った小学生のお話し会への読み手としての参加もあり、子どもたちと地域との交流が生まれました。

学校図書館との連携では、清水小学校の図書館ボランティア『プレコの会』への活動支援を行っています。

今年度は清水小学校を会場に「講談社全国訪問おはなし隊」と「道立図書館ブックフェスティバル」の2事業を行い、学校・PTA・図書館の連携をとることができました。

(H22年度お話し会(12月末現在) 18回開催、延べ315名参加)

今後の課題

『五月会』は安定した活動をしてはいますが、会員の1名減を受け、活動の停滞が心配されます。広報やPRチラシなどで会員の募集を随時行っていますが、読み聞かせの楽しさを体験してもらえようなきっかけ作りをする必要があります。

今後の対応策

- ・引き続き、読み聞かせ用の資料・情報提供などの活動支援を行います
- ・読み聞かせ体験や通信の発行など、新たな読み手の育成につながるPRを工夫します。

学識経験者の意見

平成4年度から活動を展開している図書館ボランティアは、子どもの読書活動の充実を図るとともに、読書を通じた学習意欲の向上を図る取組として評価できます。今後は、町の広報誌や学校便りなどを通して、図書館ボランティアの活動を周知する取組の充実に期待します。

幼児期(家庭)における子どもたちへの読み聞かせは重要です。本に興味を持ち続けて感情豊かに成長してほしいものです。家庭での保護者の意識高揚を期待したいです。